

大西民子生誕100周年記念展示

ひやくひやく

—埼玉県歌人会が選ぶ、大西民子百首選—

期間：2024年5月1日(水)～7月7日(日)

今年は大宮ゆかりの歌人・大西民子の生誕百年、没後三〇年の記念の年です。

今回、埼玉県歌人会の皆さまに「あなたが選ぶ大西民子の好きな歌」のアンケートにご協力をいただき、民子の歌百首を選んでいただきました。今を活躍する歌人たちは、民子の歌にどんな想いをいだいたのか。自筆資料とともに「大西民子百首選」をご紹介します。生誕百年になった今、皆さまに改めて民子の歌の魅力を感じていただければ幸いです。

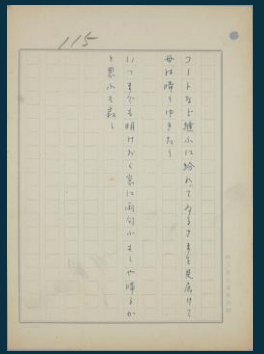
最後になりましたが、本展開催にあたり、ご協力いただきました埼玉県歌人会の皆さまに、心より感謝申し上げます。



写真「30代頃の大西民子」

西暦	年齢	あゆみ
一九二四	〇	五月八日、岩手県盛岡市にて生まれる
一九三七	十三	岩手県立盛岡高等女学校に入学。このころから短歌を作りはじめ、校友誌に掲載
一九四一	十七	奈良女子高等師範学校に入学。在学中に歌人・前川佐美雄の教えを受ける
一九四四	二〇	岩手県立釜石高等女学校に教員として赴任する
一九四七	二三	大西博と結婚
一九四九	二五	埼玉県大宮市に移住し、埼玉県立文化会館で働き始める。歌人・木保修に入門する
一九五三	二九	木保が「形成」を創刊し、民子も参加するこのころから夫と別居状態になる
一九五六	三二	第一歌集『まぼろしの椅子』刊行。以降約五年間隔で歌集を刊行
一九六四	四〇	博と協議離婚
一九六八	四四	埼玉県立図書館(のちに浦和図書館に改名)に異動
一九七二	四八	最後の家族であった妹・佐代子が死去(享年四〇)
一九八〇	五六	埼玉県立久喜図書館で勤務し、館内奉仕部長に就任
一九八二	五八	埼玉県立久喜図書館を退職 『風水』により第一六回迴空賞を受賞
一九八三	五九	師・木保修が死去(享年七六) 吉野昌夫と共に「形成」の指導者的立場になる
一九九二	六八	紫綬褒章を受章
一九九三	六九	「形成」が解散し、後輩たちのため持田勝穂と共に短歌結社「波濤」結成、「波濤」創刊号刊行
一九九四	六九	一月五日、心筋梗塞により大宮市堀の内町の自宅で死去(享年六九)。岩槻市浄国寺に埋葬される

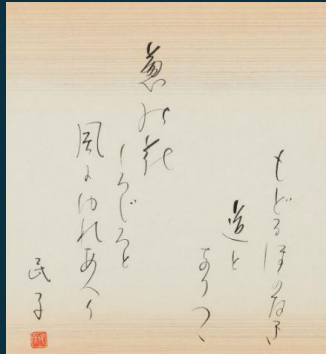
大西民子略年表



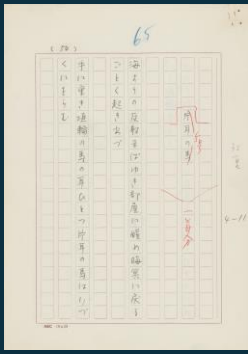
三



九



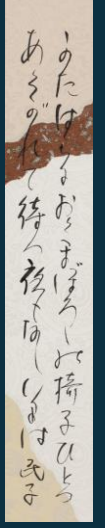
+



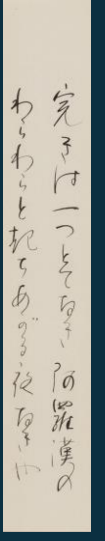
六

自筆資料展示目録

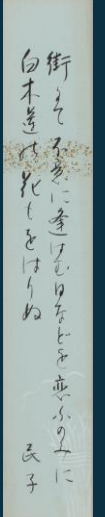
種別	内容
一 自筆原稿	「酔へば寂しがりやになる夫なりき偽名してかけ来し電話切れど危ふし」
二 自筆短冊	「かたはらにおくまぼろしの椅子ひとつあくがれて待つ夜もなしいまは」
三 自筆原稿	「いつまでも明けおく窓に雨匂ふもしや帰るかと思ふも寂し」
四 自筆短冊	「完きは一つとてなき阿羅漢のわらわらと起ちあがる夜なきや」
五 自筆短冊	「街にて不意に逢はむ日などを恋ふのみに白木蓮の花もをはりぬ」
六 自筆原稿	「手に重き埴輪の馬の耳ひとつ片耳の馬はいづくにをらむ」
七 自筆原稿	「石白のずれてかさなりぬし不安よみがへりつつ遠きふるさと」
八 自筆短冊	「枕木に雪積もりぬし夜の別れ呼び戻されむことを願ひき」
九 自筆原稿	「てのひらをくぼめて待てば青空の見えぬ傷より花こぼれ来る」
十 自筆色紙	「葱の花しろじろと風にゆれあへりもどるほかなき道となりつつ」



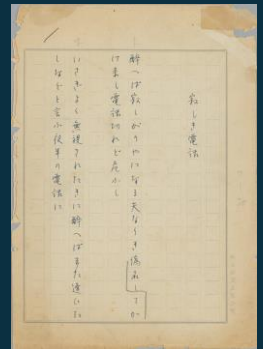
二



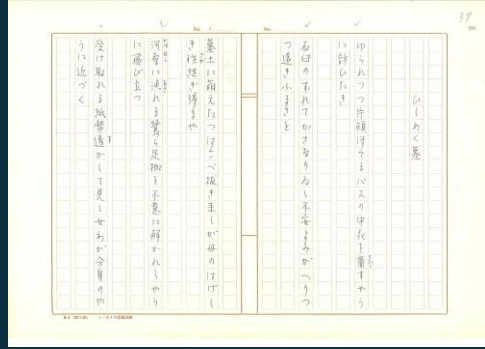
四



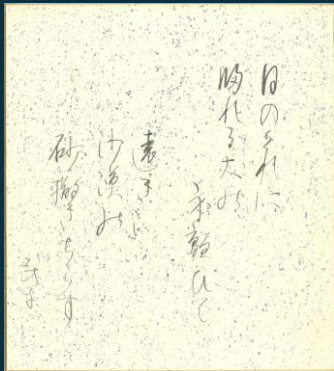
五



一



七



十一

枕木の雪積りくさくさの夜も別れ
 峠を越えられぬことを願ひ
 民子

100

一	...
二	...
三	...
四	...
五	...
六	...
七	...
八	...
九	...
十	...
十一	...
十二	...
十三	...
十四	...
十五	...
十六	...
十七	...
十八	...
十九	...
二十	...
二十一	...
二十二	...
二十三	...
二十四	...
二十五	...
二十六	...
二十七	...
二十八	...
二十九	...
三十	...

あをみさす
 ゆたのあけぼの
 まぬぬ
 あはれといふも
 知らずともはらむ
 民子

いとすぢの
 光の縄
 われを巻く
 まどろてゆけり
 民子

二二	書籍	『わりなき恋』 岸恵子 著 二〇一三年刊行・初版 幻冬舎
二一	自筆原稿	「まるまると昇る月見て戻り来ぬ狂ふことなく生くるも悲劇」
二〇	写真	浄国寺にある民子歌碑
十九	自筆原稿	「一本の木となりてあれゆさぶりに過ぎにしものを風と呼ぶべく」
十八	自筆短冊	「道のべの紫苑の花も過ぎむとしたれの決めたる高さに揃ふ」
十七	自筆色紙	「あをみさすゆきのあけぼのきぬぎぬのあはれといふも知らずをはらむ」
十六	自筆原稿	「円柱は何れも太く妹をしばしばわれの視野から奪ふ」
十五	自筆原稿	「報復は神がし給ふと決めをれど日に幾たびも手をわが洗ふ」
十四	自筆短冊	「桃の木は葉をけむらせて雨のなかともに見し日ハ花溢れぬき」
十三	自筆色紙	「ひとすぢの光の縄のわれを巻きまたゆるやかにもどりてゆけり」
十二	自筆色紙	「降りやまぬ雨の奥よりよみがへり挙手の礼などなすにあらずや」
十一	自筆色紙	「日のくれに帰れる犬の身顛ひて遠き沙漠の砂撒きちらす」

所蔵は全て大宮図書館です

概ね木は葉をけむらせて雨のなかともに見し日ハ花溢れぬき
 とくにふくはれぬ民子

道のべの紫苑の花も過ぎむとしたれの決めたる高さに揃ふ
 民子

101

一	...
二	...
三	...
四	...
五	...
六	...
七	...
八	...
九	...
十	...
十一	...
十二	...
十三	...
十四	...
十五	...
十六	...
十七	...
十八	...
十九	...
二十	...
二十一	...
二十二	...
二十三	...
二十四	...
二十五	...
二十六	...
二十七	...
二十八	...
二十九	...
三十	...

河津もあけぼの如く花はは潮愛しく今
 朝の海
 ...
 民子

降りかかると
 るお奥
 よみさす
 拳をたれぬと
 なすにあらずや
 民子

102

一	...
二	...
三	...
四	...
五	...
六	...
七	...
八	...
九	...
十	...
十一	...
十二	...
十三	...
十四	...
十五	...
十六	...
十七	...
十八	...
十九	...
二十	...
二十一	...
二十二	...
二十三	...
二十四	...
二十五	...
二十六	...
二十七	...
二十八	...
二十九	...
三十	...

酔へば寂しがりやになる夫なりき偽名して
かけ来し電話切れど危ふし

1
乱れた生活を送っている別居中の夫・博ひろしが、ある日偽名で電話をかけてきました。酔えば寂しがりやになる夫を思い出し、電話を切ったあと民子は胸騒ぎを感じました。

かたはらにおく幻の椅子一つ
あくがれて待つ夜もなし今は

2
『まぼろしの椅子』という歌集名の由来となった一首です。夫は大宮に来てから急に人が変わってしまった、だんだん家に帰らなくなってしまう。かたわらに座るべき夫を、毎晩はかなく待ち続ける民子でしたが……。

いつまでも明けおく窓に雨匂ふ
もしや帰るかと思ふも寂し

3
夫が帰ってきたらすぐに気づけるように、明けのままにした窓から、降り出した雨の匂いが出てきます。今日こそ帰ってくるかもと期待してしまうことに、寂しきを感じました。

完まっきは一つとてなき阿羅漢あらかんの
わらわらと起たちあがる夜無きや

4
経年の劣化により、完全な形を保ったものはない阿羅漢（羅漢）像。夜が更けて、それらが動き出すことはないのでしょうか。民子は、私自身のようだとも言っています。

街にて不意に逢はむ日などを恋こひのみに
白木蓮はくもくれんの花も畢おりぬ

5
木蓮は、民子の好きな花の一つです。民子は、浦和の県庁に仕事で出向いた際、中仙道のほとりにある大きな白木蓮を見るのを楽しみにしていました。別居中の夫が県立図書館で働いていたため、出会ったらどうしようと考えたこともありました。

手に重き埴輪はこわの馬の耳ひとつ
片耳の馬はいづくにをらむ

6
夏のある日、文化会館で仕事中の民子のもとへ、少年が訪ねてきました。父親が拾ったのだといながら差し出されたものを見ると、それは馬の埴輪の片耳でした。いつかこの馬が見つかった時のためにしまっておきましょうねと、民子は少年に優しく声をかけました。

石臼いしうすのずれてかさなりぬし不安
よみがへりつつ遠きふるさと

7
石臼は、二つの石が重なってうまく擦れなければ、いい粉ができません。その石がずれているのを見た民子は、遠い故郷での出来事を思い出したのでしようか。不安な気持ちが心をよぎったようです。

枕木まくらぎに雪積もりぬし夜の別れ
呼び戻されむことを願ひき

8
雪の日の線路の光景を詠んでおり、故郷の岩手の光景とも、大宮の風景とも捉えることができず。この歌が作られたのは、離婚の前年でした。別れを決意したはずの民子でしたが、もう一度呼び戻してほしいと望んだのでしょうか。

てのひらをくぼめて待てば青空の
見えぬ傷より花こぼれ来る

9
はらはらと目の前に降ってきた花びらを、民子はへこませた掌で優しく受け止めました。きつとこの花びらは、空の見えない傷からこぼれて来たのだらうと、詩的に捉えています。このような斬新な発想から、民子の代表歌の一つとされています。

葱の花しろじろと風に揺れあへり
戻るほかなき道となりつつ

葱の花が目にも白く風に揺られていて、今はもう戻るほかなき道となってしまったと詠んでいます。離婚して間もない頃に作成された一首で、傷ついた民子の心情が、あきらめの境地に至ったのでしょうか。

日のくれに帰れる犬の身顫ひて
遠き沙漠の砂撒き散らす

夫と離婚し、妹と二人で暮らしていた民子は、番犬として「ローリエ」という名の犬を飼いました。家に帰ったローリエが、身ぶるいしながら砂を撒き散らす様子は、砂丘や、沙漠が舞台の小説を思い起させました。

降りやまぬ雨の奥よりよみがへり
拳手の礼などなすにあらずや

降りやまない雨の中から、彼がよみがえって敬礼をすることはないのであるか、と秋篠寺（奈良）で出会った青年に想いを馳せています。エッセイの中で、民子はこの青年は明日戦争に行くという大学生だったと書いています。

ひとすぢの光の縄のわれを巻き
またゆるやかに戻りてゆけり

一筋の光のような縄が巻き付いたと思うと、ゆっくりと戻っていきます。民子自身を巻いていくという、幻想的な表現ともいえる光の縄は何を表わしているのでしょうか。民子自身は、詳しく説明していません。

桃の木は葉をけむらせて雨のなか
共に見し日は花溢れぬき

雨の降る中、桃の木はぼんやりと葉を茂らせています。以前、この桃を一緒に見たのは誰だったのでしょうか。その時は、花は溢れんばかりに咲いていました。

報復は神がし給ふと決めをれど
日に幾たびも手をわが洗ふ

異動先の県立浦和図書館は、別れた夫のかつての職場で、プレッシャーを感じることもあったそうです。報復は神の行為だと思いつつも、それを考えてしまう自身の心情を手洗いと一緒に洗い流そうとしているのでしょうか。

円柱は何れも太く妹を
しばしばわれの視野から奪ふ

関西出張の合間に奈良の唐招提寺に立ち寄った民子は、太い円柱に妹の佐代子を見失うような感覚がしたと詠んでいます。実際には、妹は同行していませんでしたが、予感はそのものとなり、この歌が発表された三ヶ月後、佐代子は四〇歳で急死してしまいました。

青みさす雪のあけぼのきぬぎぬの
あはれといふも知らずで終らむ

「きぬぎぬ」とは、衣を重ねて共寝した男女が翌朝めいめいの衣を着て別れること、またその朝という意味です。民子は、朝日をあびて青みを帯びた雪を見た時、きぬぎぬのあわれを味わってみたいと憧れることもあったと回想しています。

道のべの紫苑の花も過ぎむとし
たれの決めたる高さに揃ふ

五〇代になった民子は、松尾芭蕉の『笈の小文』の一節「造化にかへれ」（俗事に関わらず、自然に帰る）という言葉に影響を受けます。誰に言われたわけでもなく、背丈を揃えて咲く花を見て、自然の力に感銘を受けた民子は、この歌を『野分の章』の最初に置きました。

一本の木となりてあれゆさぶりて
過ぎにしものを風と呼ぶべく

風に揺られ枝が折れ、葉がおちても、何事もなかったかのように木は大地に立っている、そんな姿でありたいと、願いを込めて詠んだ歌です。この歌を意識してか、民子は悩みを抱える知人に「大丈夫よ。風は必ず過ぎてゆくんだから」と言って、励ましたそうです。

まろまろと昇る月見てもどり来ぬ

狂いことなく生くるも悲劇

まんまると輝く月を見ながらの帰り道、民子は自身の人生を振り返ります。輝く月に惑わされて、怒りに身を惑わされることもなく生きてきたことも、一つの悲劇ではないかと感じました。

死ぬ時はひとりで死ぬと言ひ切りて
こみあぐる涙堪へむとしたり

民子は二年ぶりに会った夫から、「一緒に死んでくれ」と迫られました。同居中の女性から、「別れるなら硫酸をぶっかける」と脅されていたのです。しかし民子は、自分も何度辛い想いをしたか分からない、死ぬ時は一人で死ぬと断り、涙をこらえました。

さまざまの見方されるわれと知る
酔ひし友に今日は貞女と呼ぶる

「貞女」とは、みさおの堅い女性、貞節を守る女性のことです。今日、民子は友人からそう言われてしまいました。じつと夫の帰りを待っていたため、冷たい女と噂されたこともあったそうです。人々からの好奇の目にも耐えなければなりませんでした。

生きてゆく幅を少しでもひろげたく

昇任試験受けて見むとす

当時の民子は、夫との関係がうまくいっていなかった上に、実家を頼ろうにも大黒柱だった父はすでに亡くなっていました。戦後まもなくの世情を考えると、不安に感じることも多かったでしょう。少しでも自分の可能性を広げるため、昇任試験を受けることにしました。

陽の昇れば忽ちデュファイの海となり
スカートをつくらませてわれも佇つ

ラウル・デュファイは、色鮮やかな色彩が特徴のフランスの画家です。海岸で遊ぶうちに、ふとデュファイの海の絵を思い浮かべた民子は、折からの風にスカートをつくらせながら、しばしその場に佇みました。

渴きゆく日々と思ふに野いばらは
グラスの水吸ひ上げて次々に咲く

花が好きだった民子は、野いばらを机に飾っていました。結婚生活が破綻し、干からびていくような自分とは対照的に、水を吸って次々と花を付ける野いばらの姿に、民子は何を思ったのでしょうか。

われの外開くる人なき部屋の鍵

をりふしバググの底にて鳴れり

夫と別居していることは、自宅のドアを開けるのが自分しかいないことを意味しています。バググに入った鍵が冷たく音を立てるたびに、寂しさを突き付けられるような思いがしました。

帰らざる幾月ドアの合鍵の
一つを今も君は持ちゐるらむか

仕事に行った夫がそのまま帰らなくなってから、何ヶ月も経った頃の歌です。夕方、帰宅した民子は夫の持っていた鍵のことを考えます。別の女性と暮らしているという彼は、まだ鍵を持っているのだろうか、それとも捨ててしまったのだろうか。

背高き妹に似合ふや縫ひ終へし
水色のドレスをたたみ眠らむ

民子は裁縫が趣味で、若い頃は洋服を自分で作っていました。背の高い妹、佐代子のため作っていた水色のドレスが、ようやく出来上がりしました。身につけてはにかむ妹を想い浮かべながら、ドレスを畳んで寝ることにします。

ハンストに傷つける友を見舞ひ来て
慰めがたし今日の心は

ハンストは、「ハンガーストライキ」の略で、絶食で決意を表す抗議活動の一種です。同じころ発表された歌には、「国の不幸の源を思ふことなしやハンストの前を少女らは過ぐ」とあります。国の未来を想い、ハンストで弱ってしまった友人に心を痛めました。

今朝はやや立ち直りたるわが心
野ばらの唄うたひて勤めに行かむ

「野ばら」は、ゲーテの詩を歌にした童謡で、日本ではシューベルトや、ヴェルナー作曲のものが有名です。別居による心労から少し立ち直った朝、思わず「野ばら」を歌いながら出勤する自分がいきました。

バス降りて十字路をよぎり来る君よ
夕陽の中のわれに手あげて

釜石市内でお付き合いを始めた民子と博でしたが、郊外に勤務していた博は、民子に逢うためバスを利用することもありました。待ち合わせをしたある日の夕方、身を隠すように待つ民子のもとへ、バスを降りた博は、大胆にも手を振りながら、道路を渡ってきました。

夢のなかといへども髪をふりみだし
人を追ひみきながく忘れず

別居生活中、表向きには冷静を装っていた民子でしたが、ある日、髪を振り乱しながら夫を追いかける自分の姿を夢に見ます。感情をあらわにしたその姿に、目覚めたあとも強い衝撃を受け、そのことは長く心に残ったのでした。

妻としての最後の逢ひとならむ夜の
よるべなき身を燈下にさらす

十年も経ったのだから、正式に離婚してほしい」と夫が民子を訪ねたのは、一九六四(昭和三〇)年六月のことでした。話し合いは、わずか三〇分ほどだったそうです。妻として夫と会う最後の夜、頼る術がなくなった我が身が、電灯の下にさらされていました。

わかち持つ遠き憶ひ出あるに似て
ひそかにゐたり埴輪少女と

文化会館に付設された郷土館は、民子好きな場所でした。中でも、展示されている埴輪の巫女がお気に入り、人目を忍んで彼女と一緒に過ごす時間は、遙かな思い出を共有するかのよう

遺されし塑像が招く追憶に
故意にはぐれて逢はぬ夜ありき

塑像とは粘土で作った像のことです。民子は、かつて奈良で見た仏像を想い起こしているのでしょうか。その姿からは、次々と記憶がよみがえってきますが、想い出を打ち消そうとする夜もあつたようです。

身を逼むる不文の掟思ふ夜も
ミモザがこぼす黄なる花びら

第二歌集のタイトルになった歌です。民子は、「不文の掟」とは、未来は無限ではなく、過去によって決まってしまうことを意味していると言っています。ミモザの花びらが散りゆくさまを、「不文の掟」という言葉に重ね合わせたのでしょうか。

ほの白く鶏舎に残りてゐし一羽
思ひ倦みたるごとくはばたく

鶏小屋に残った最後の一羽が、何かを思うことに飽きたかのようにふとはばきました。その様子を見ていた民子は、残った一羽の仕草にどんな思いを重ねたのでしょうか。

突き落とす刹那に醒めし夢のあと
色無き雲の流れてやまず

夢の中で誰かを突き落とす瞬間、ハッと目が覚めました。相手は、誰だったのでしょうか。自分の中に秘めた想いが見え隠れするように、ただひたすらに流れていく雲を見るような気分が続きました。

踏みはずす夢ばかり見て来しわれか
霧のなかより縄梯子垂る

華々しく故郷を後にした民子でしたが、思い描いていたものとは違う新生活を過ごすにつれ、何かを踏み外すような夢を見るようになりしました。さらにある日には、縄梯子が垂れてくる夢をみます。さて、梯子を昇った先には何が待ち受けているのでしょうか。

切り株につまづきたればくらがり
無数の耳のごとき木の葉ら

第三歌集のタイトルになった歌です。ある夜、暗闇で切り株につまづいた時、地面に広がる落ち葉が目に入ります。重なり合う落ちる葉が、無数の耳のように見えたのでしょうか。

女にてつひに敗るる日もあらむ
香水の瓶幾つも溜めて

目の前には、これまでに買った香水の瓶たちが並んでいます。女を装い、戦いぬく戦友でもあったのでしょうか。民子は、それらを前にして、女だからという理由で負けてしまうこともあるのだろうかという詠んでいます。

袖口の毛系のほつれ見しことも
別れ来し夜のかなしみを呼ぶ

夫のことなのでしょう。別れの夜、彼の服の袖口がほつれているのを見つけてしまいます。長年離れて暮らしてきた夫の生活が、充分ではないことを知り、さらに悲しみは深くなりました。

宿り木の青みわたれる森を行く
つめたき陶の卵を持ちて

別居が長くなった民子は、母と妹が住む、旧岩槻市の浄国寺の離れに身を寄せました。寺の森には、枯れ木に寄生する青々と茂った宿り木がありました。生き生きとするその繁茂に比べ、自分には孵すこともない陶器の卵しか持ち合わせないと嘆いています。

煽られし楽譜を拾ふ時の間に
ドビュッシーもわれは逃がしてしまふ

民子がドビュッシーの「水のたわむれ（戯れ）」を弾いていると、ふと風が吹いて楽譜が舞い落ちました。楽譜を拾って弾き直そうとした時には、自分の中で浸り始めたドビュッシーへの感慨まで逃したような気持ちになったのでしょうか。

両肩をシヨールにくるみ眠る夜々
帰りて住まむふるさともなし

民子は岩手で生まれ育ちました。寒い夜、シヨールにくるまってしていると、思わず故郷のことを思い出しますが、もう帰ることもないのだと自分に言い聞かせます。この頃には、故郷を封印するような歌がいくつかあります。

ひび入りて伏せおく大き甕ひとつ
みどり児の声漏るる夜無きか

郷土館で展示するため、民家から藍甕あいがめをもらいました。民子も、その中でひびのあった甕は伏せたまま保管されました。民子は、その甕を見ているうちに、暗闇の中に誰かいるのではないかと恐怖を感じます。そして、ここから赤ん坊の泣き声が聞こえてくる夜もあるのではないかと想像しました。

マラソンの少年一人音もなく
夜更けの坂を下りてゆきぬ

ある夜、もくもくと走る少年を見かけます。彼は、街中を静かに走りぬけ、やがて夜更けの坂を下っていききました。師の木俣修きまたおさむから「歌はマラソン」と教わっていた民子は、ひたむきに走る様子に心を動かされたのでしょうか。

みどり児の墓は根雪にうもれむ
遠き河原に餅草を摘む

民子は、岩手にいたころ男児を死産しています。我が子は、故郷の山にある墓地に埋葬されましたが、埼玉に来てからは墓参りすることはありませんでした。餅草とはヨモギのことです。民子は餅草を摘みながら、今は亡き我が子を偲びました。

眠られぬ夜々に思へばみづからの
羽根抜きて紡ぐよろこびも無し

民子は、戯曲「夕鶴」を見ました。民話「鶴女房」を題材にしたこの劇は、鶴である妻が夫のために自らの羽根で布を織る話で有名ですが、今の自分には献身する相手もないと、民子は眠れぬ夜を過ごします。

亡き父のマントの裾にかくまはれ
歩みきいつの雪の夜ならむ

刑事の父は、冬には制服の上に黒いマントを羽織っていました。民子は晩年、マントを返し歩く姿がかつよかったと言っています。ある寒い冬の夜に父と出かけた民子は、広いマントにくるまれて歩きました。自分を守るように歩く父の、温かな愛情を懐かしく詠んでいます。

事務服をロッカーにしまひその奥に
脱ぎたる顔の一つもしまふ

一日の仕事が終わり、更衣室でロッカーに事務室服を仕舞うとき、さらにその奥には、職場用につくっている別の顔も仕舞っていたと明かしています。この頃の民子は、浦和の県立図書館で勤務していました。

ふり向けばいつの間に来て草むらに
音もなくゐるシャガールの牛

シャガールはロシア（現在のベラルーシ）出身の画家で、幻想的な画風で知られています。民子は歌のイメージを求めて、よく画集を眺めていました。ある時、振り向いた目の前に牛が現れ、自分も草むらにいたのかのような驚きを覚えませんでした。

あたたためしミルクがあましいづくにか
最後の朝餉食む人もむ

温めた牛乳を飲んで、その甘さを噛みしめていると、今まさに最後の朝食を食べている人も、どこかにいるのではないだろうかと思いました。ありふれた日常生活を営む中、民子は、頭をよぎった些細なことでも歌にしています。

バスを待つ寒き川べり胸の毛を
よごして帰るわが犬に会ふ

民子と妹は、「ローリエ」という犬を飼っていました。冷えこむ日に民子がバスを待っていると、胸の辺りの毛を汚した散歩中のローリエに出会いました。思い切り遊んだのであろう愛犬に、微笑ましくなったのでしょうか。

仰向けの髪つくづくと梳すかれりて
地軸といふはどの方角か

美容室での出来事なのか、夢の中の光景なのか。仰向けに横たわり髪を、梳すいてもらっています。地軸とは、地球を南北に貫いている地球の回転軸のことですが、伸びた髪を梳すいていく方向に思いが及んだのでしょうか。

夜もすがらわれに来てゐて雪の上にも
跡も残さず去りし何もの

ある日のこと、一晩中何かが家の周辺にいる気配がしましたが、翌朝見てみると、雪の上には何の足跡も残っていませんでした。何者がやって来たのでしょうか。もしかして、自分に伝えたいことがあったのでしょうか。

山脈も芽ぐむ木立も遠く澄み
空からこはれてくるやうな日よ

山々も、木々の芽吹きも、澄み渡って見えるような風景。しかし、その平穏であるかのような光景も雷雨などによって突然崩れていってしまうのではないかと思います。何かを急に失う恐れが、胸に去来したのでしょうか。

駅までを連れだちてゐて身の左
庇はれて歩むことのやさしさ

知人と浦和に出かけた際、連れだって道路を歩いていると、左側は車道に近く危ないからと、右側を歩くようにエスコートされました。独身に戻り、懸命に働いていた民子は、そのやさしさが心に染みたと語っています。

水道をとめて思へばかなしみは
叩き割りたき塊かたまりをなす

蛇口をひねって水を止めるといふ、日常のふとした瞬間、亡くなった佐代子のことを思い出しました。仲の良かった妹を突然失った悲しみは、どんどん大きくなり、叩き割ってしまいたいと思うほどの塊になりました。

半ばなかよりそれでありしを取り戻し
帰らむと立つ会議終りて

会議の途中、論点が逸れてしまっているのを見逃さなかった民子は、すかさず軌道修正をしました。無事閉会し、帰ろうと席を立った時、会議の疲れより、その充実感を感じたのでしょうか。

明日の夜になさむ仕事を残しおく
眠りゐる間に死なざらむため

妹の佐代子が、就寝中に突然亡くなったことは、民子に大きなショックを与えました。肉親がみれば比較的若くして亡くなっていることもあり、寝る前のまじないのように、しなければならぬ仕事を次の日に残すことにしました。

亡き人のシヨールをかけて街行くに
かなしみはふと背にやはらかし

妹の遺したシヨールをかけて街へ出かけた時のこと。その柔らかい生地が温かく、佐代子が自分の悲しみを包み込んでくれるように感じました。辛い気持ちを抱えつつ、民子も少しずつ前に進み始めました。

忘るるといふにはあらね意識して
焦点を移すことに慣れゆく

亡くした妹について詠んでいるのでしょうか。忘れるというのではない、忘れられるはずがない、と強く言い切っています。妹がもうこの世にはいないことに対して、自分なりのやり過ぎし方を見つ、次第に受け入れていったようです。

もし馬となりゐるならばたてがみを
風になびけて疾く帰り来よ

榛名湖畔で一頭の馬を見かけ、佐代子への想いに及んだようです。妹がもし馬に生まれ変わっているなら、たてがみをたなびかせて早く戻ってきて、と呼びかけたい気持ちになりました。

玉虫をあまた集めき玉虫を
なべて逃がしきこの白き手に

玉虫は、七色に輝く美しい昆虫です。幸せな学生時代をはじめ、自分の人生を振り返っているのでしょうか。しかし、その幸せも手に握りこむことなく、大人になってすべてを失ってしまったと嘆いています。

洋傘へあつまる夜の雨の音
さびしき音を家まではこび

降りしきる傘に雨の音が集まり、その傘が音を運んでいくという視点が独特です。誰もいない家へ帰るのは寂しいものですが、雨の音にまで付きまどっている寂しさが、ひしひしと伝わってくるようです。

引力のやさしき日なり黒土に
輪をひろげゆく銀杏の落ち葉

県立浦和図書館で働いていたころ、民子は昼休みに町の散策を楽しんでいたそうです。ある日、浦和の古刹・玉蔵院の銀杏の木を見ていたら、黄色の葉がゆるやかに落ちて、根元に輪のように広がっていました。美しい黒と黄色の織り成す光景に、民子はしばし見とれていました。

妹といふあいらしきもの日も夜も
わががたはらにゐたる日ありき

八歳年下ということもあり、妹・佐代子のことを時に我が子のように愛しく感じることもあったようです。この歌について、「妹って愛らしきものなの？」と友人に聞かれた際、民子は「あいらいでいいのよ」と言い切ったといいます。

物体の重さとなりて運ばるる
日もあらむ身を横たへ眠る

横になって眠りに就くとき、いつか棺で運ばれていく自分の最後の姿を想像しました。すべての肉親を失ってしまった民子は、自分の死をも現実感をもって考えるようになったのでしよう。

うち揃ひ夕餉なしたる日のありき
小さき額の絵のごとく見ゆ

最愛の妹の急死によって、ひとりぼっちになった民子は寂しい生活に耐え続けてきました。両親と姉、妹、自分という、家族が揃って過ごせたのは、民子がわずか十二歳の年まででした。家族団らんの日々は、小さい額絵のように遥かに遠い思い出のようです。

亡き人の真珠の耳輪手にのせて
かなしみはふとわれを清くす

「亡き人」とは、妹の佐代子でしょう。佐代子が亡くなってからいくつもの月日は過ぎていきましたが、遺品のイヤリングを手にしたと眺めていると、自身の心の奥に残る悲しみが、浄化されるような気持ちになりました。

亡き人のたれとも知れず夢に来て
菊人形のごとく立ちゐき

菊の花や葉で、人形の衣装を形作ったものが菊人形です。菊人形展を見た民子が、その面影を脳裏に留めていたのでしょうか。夢の中に現れた知らない人物が、菊人形のように立っていたと詠んでいます。

位置を替へ鳴きなほしつづ減びゆく
かなかなは今櫂の梢

ある日、民子はかなかな(ヒグラシ)を見かけました。時折位置を変えながら、ケヤキの木にとまって懸命に鳴いています。かなかなの寿命は、三週間ほどしかありません。命が潰れるまで懸命に泣き続けるかなかなに、一層もの悲しさを感じました。

どのやうに生きても一生繭なさせぬ
糸を吐きつぐ一生もあらむ

両親の出身地・福島県二本松市(にほんまつし)、そして民子家が構えた埼玉県も、かつては養蚕(ようさん)の盛んな地域でした。様々な人生の中には、一生繭を作ることはないまま、糸を吐き続けるような人生もあるかもしれないと詠んでいます。

その母に返して胸のさびしけれ
あたたかかりしみどり児の嵩

我が子を亡くした日から何年経っても、民子はその悲しみを忘れることはなかったのでしょうか。知人の赤ちゃんをだっこさせてもらった民子は、母親に返した後も胸に残るあたたかなぬくもりに、少しの寂しさを感じました。

いづくまで昇るか知れぬ昇りゆき
土に戻らぬ穂わたもあらむ

高く舞い上がっていく穂綿(ほわた)は萱(かや)の穂でしようか、葦(あし)の穂をでしようか。本来地面に落ちて芽吹くはずの穂綿ですが、どこまでも空を昇っていき、地上へ戻ることもできない穂綿もあるのではないかと民子は考えました。

春の虹あえかに立てば事務室の
たれもやさしく窓ぎはに寄る

春の日の雨上がり、空には儂(ほかな)げに虹がかかりました。思わずだれかが「虹だ」というと、同僚たちも窓際に集まります。職場の雰囲気が一気になごむ様子を詠んだ歌です。

デッサンのやうにそばだちあしビルの
光の塔となりて暮れゆく

モノクロのデッサン画のようにそばえ立つビルが、夕暮れの陽の光を浴びて、光の塔のように輝きだしました。夕刻の移り変わる風景に、民子は何か感じ取るものがあつたのでしょうか。

妻を得てユトレヒトに今は住むといふ
ユトレヒトにも雨降るらむか

民子の晩年、ふとしたことから別れた夫が再婚して幸せにくらしていると耳にしました。ユトレヒトは、オランダに実在する町ですが、実際夫が住んでいたのは日本国内でした。異国の街にも雨が降っているのだろうかと思ふ民子の気持ちは、夫の身を案じるものだったのでしょうか。

春の夜と思ふやさしさこぼしたる
香水のあともすぐ乾きたり

やさしく感じる春の夜に、香水をこぼしてしまった民子。そのかぐわしい香りも、すぐに消えて乾いてしまうと詠んでいます。

白百合(しらゆり)の絵にまだ青きつぼみ見ゆ
つぼみも咲きて花終へにけむ

白百合の絵には、花とともにつぼみが描かれています。絵の中では、いつまでも青々としているつぼみですが、現実のつぼみは、いつか花となり、やがて枯れていくのでしょうか。民子は、時の流れに想いをめぐらせたのでしょうか。

目に見ゆるこのころの如くナプキンの
かたちやさしくたたまされたり

テーブルには、美しくたたまれたナプキンが置いてあります。食事をしようとした民子は、まるで目に見えるかのような優しい心遣いを感じました。ナプキンひとつから、温かいもてなしの気持ちに包まれたのでしよう。

石像のいただける琵琶の鳴り出づる
夜もありにけむ風のまにまに

静かにたたずむ石像が抱く琵琶。民子は、その琵琶が突然音を奏でることを想像します。風の成り行きに任せて、琵琶の調べが聴こえてくる夜もあるのではなからうかと。

霊柩車を先立ててゆくバスのなか
不意に時刻を問ひし人あり

葬儀の際の一場面でしょう。霊柩車に続いて走るバスの車内は、静かに故人をしのぶ空気に包まれていましたが、ある人が不意に今の時刻を尋ねます。現実には引き戻されたような思いがしたのは、民子だけではなかったでしょう。

色の無き葡萄摘みる夢なりき
色無き房は手に重かりき

夢の中で、民子は葡萄を摘んでいました。色のないその房は、もしかすると本物の葡萄ではないのかもしれない。手にずしりと重さを感じるこの房には、何がどれほど詰まっているのでしよう。

吹きしまく砂塵にまなこ閉ぢをれば
めくれてゆけり野原一枚

見渡す野原一面が砂塵に見舞われます。思わず民子が目を閉じると、まぶたの裏には、ページをめくるように、まったく別の世界が現れてきました。過去に見た風景、あるいはこれから見る風景だったのでしようか。

合はせたるグラスの音のかそかにて
この世を去らむ順など知れず

高齢者が多く集まった席なのでしょう。乾杯の発声とともに、グラスを合わせる音が小さく鳴り響きます。その儚げな音色に、それぞれの老い先を案じたものの、気にはならないと結んでいます。

見つからざりし巻尺が今出でて来て
一メートル五〇まで伸びて見す

長い間、失くしたと思っていた巻尺が出てきました。民子が戯れに伸ばしてみると、巻尺自身が、元気でしたと言わんばかりに、一メートル五〇センチまで伸びて見せるようでした。何気ない暮らしの中の一コマを詠んでいます。

フィナーレに近づかむとし早まりて
一個あがれる風船赤し

式典のフィナーレを飾るのは、一斉に放たれ、舞い上がる風船の光景です。ところが、赤い風船が一つだけ、フライングのように空を上がっていつてしまいました。民子は、その光景に一つの人生を重ね合わせたのでしようか。

そのかみの文学少女波の音の
テープを聴きて眠らむとする

若かりし頃の民子は、文学好きな少女でした。録音テープで、ふるさと岩手の海を思い出させるような波の音を聞くと、その頃の心境や光景がよみがえってくるのでしよう。安らかに眠りにつこうとしています。

本当に鍵あけて柵をのがれしや
吠ゆるほかなくこの犬はゐる

自ら鍵を開けて逃げ出した犬が戻ってきた、と話す飼主の説明に、民子は疑問を覚えます。ただひたすらに吠え続ける犬は、何を訴えているのでしょうか。犬と暮らす経験を持つ民子は、その犬の様子を気にかけているのでしょうか。

ねんごろの見舞ひなりしが去りぎはに
人のいのちを測る目をせり

晩年の民子は、病気がちになり入院したこともあります。そんなとき、知人が心のこもったお見舞いに来てくれました。ところが、知人は帰り際自分の余命をうかがう目つきをしていることに気づきます。民子の平らかな観察眼は、ときに見えなくてもいいものが見えてしまうのでしょうか。

どのやうにおろされにけむかの大き
薬種問屋の看板などは

閉店した薬種問屋（薬を扱う問屋）を見て、あの店にかかっていた大きな看板は、どうやって下ろしたのだろうかと思議に思います。晩年の民子は、看板を下ろすという行為を、自身の身じまいに重ね合わせたのでしょうか。

風の夜の更けゆくままに金属の
冷たき椅子はいづこの駅か

第一歌集が『まぼろしの椅子』であったように、民子は椅子に特別なイメージを抱いていたのでしょうか。あれはこの駅だったのでしよう。風が吹き、夜が更けていくにつれて、冷たくなってしまった金具の椅子を思い出します。

誰に言ふことにならねどそののちの
四十年は速く過ぎにき

そののちとは、大宮に来てからという意味でしょうか。別居から離婚、仕事の苦労や家族との死別など、さまざまな困難を体験しながら、この四〇年はあつという間に過ぎていったと言っています。誰にむかつて言うこともなく、静かに自らを振り返っているのでしょうか。

ひるがへる僧衣の袖にすきとほり
どこか異界を見たりし如し

どこかで見かけた光景なのでしょう。僧侶が身にまとう法衣の袖がひるがえった時、薄手の生地のおむこうに、あの世と呼ばれる異世界と、つながっているかのような感覚を覚えました。

はるかなる吉祥天に献げむに
ゑのころぐさをコップに挿しぬ

はるかなる吉祥天とは、学生時代を過ごした、奈良・薬師寺の吉祥天像を指しているのでしょうか。民子は、遠く離れた吉祥天に何を祈ったのでしょうか。身近にあったコップに、エノコログサ（猫じゃらし）という野草を献じます。

来む世にはゑのころぐさとわがならむ
抜かれぬやうに踏まれぬやうに

晩年の民子の歌には、しばしば自分の来世について詠んだものがあります。生まれ変わったなら、自分はエノコログサ（猫じゃらし）になりたいたいと言ひ、抜かれないやう、踏まれぬやうにと、困難に遭わぬことを祈っています。

明日ありと思はれずゐるわが前に
光たばねて噴水あがる

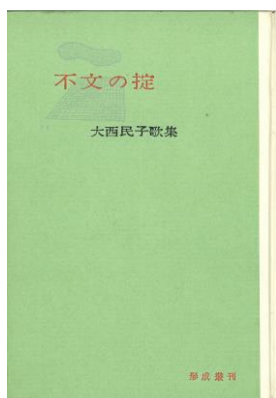
明日をも知れぬ身を案じる民子の前に、何本もの光の線を束ねるやうに噴水が上がっていく光景が現れます。この頃、民子は「波濤」を創刊することを決意しています。勢いよく上がる噴水に若い後輩たちを想ったのでしょうか。

大西民子百首選

掲載歌集の紹介

住み古りし町なれど大きマンションの
 建ちていきなり白し目の前

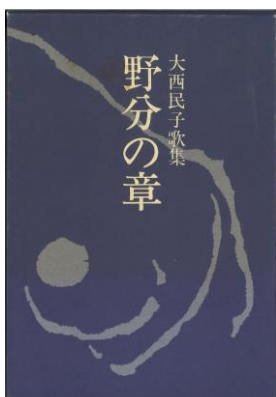
一九六八（昭和四三）年、堀の内に家を買った民子は、亡くなるまで約三〇年間にここで過ごしました。その間、ベッドタウンとして発展した大宮は、著しい変化を遂げます。自宅のまわりでも、いきなり現れる白亜のマンションに驚いたことが少なくありません。



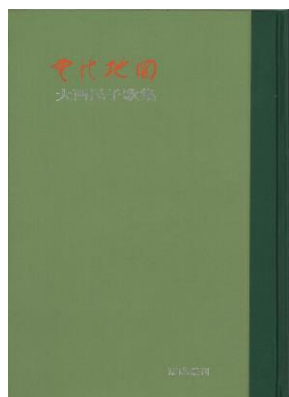
第二歌集
 『不文の掟』
 四季書房 1960年
 No.4~6、32~39



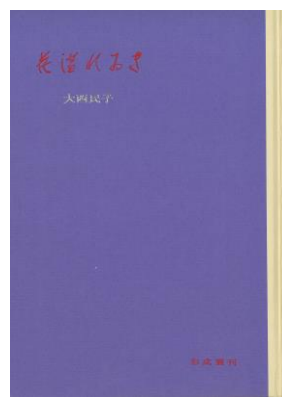
第一歌集
 『まぼろしの椅子』
 新典書房 1956年
 No.1~3、21~31



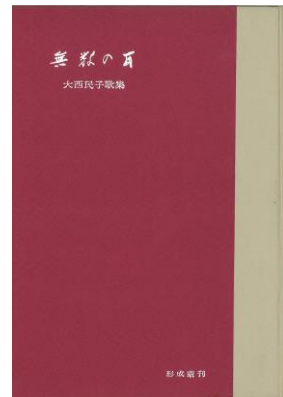
第六歌集
 『野分の章』
 牧羊社 1978年
 No.18、66、67



第五歌集
 『雲の地図』
 短歌研究社 1975年
 No.16、17、57~65



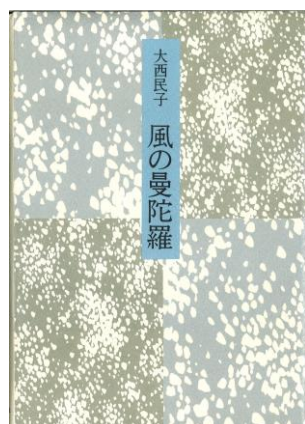
第四歌集
 『花溢れみき』
 短歌研究社 1971年
 No.10~15、48~56



第三歌集
 『無数の耳』
 短歌研究社 1966年
 No.7~9、40~47



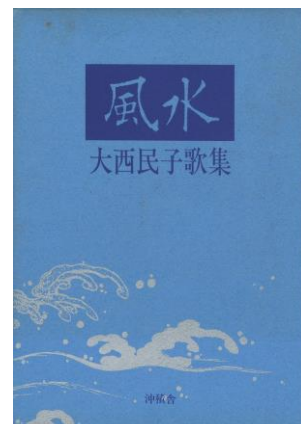
遺稿集(第十歌集)
 『光たばねて』
 短歌新聞社 1998年
 No.94~100



第九歌集
 『風の曼陀羅』
 短歌研究社 1991年
 No.86~93



第八歌集
 『印度の果実』
 短歌研究社 1986年
 No.79~85



第七歌集
 『風水』
 沖積舎 1986年
 No.19、20、68~78

過去の文学資料コーナー展示

2019年度	
	大宮ゆかりの歌人・大西民子の生い立ち
第1回企画展	大西民子と、ふるさと岩手
第2回企画展	明星派の世界 ～北原白秋から大西民子の系譜～
第3回企画展	大西民子の冬のうた
第4回企画展	大西民子と万葉集

2020年度	
開館1周年 記念展示	与謝野晶子と大西民子 ～大西民子が憧れた歌人・与謝野晶子～
第5回企画展	民子の日常
第6回企画展	詩人・宮澤章二と大宮
第7回企画展	民子の心を支えたもの -奈良・寺・仏-
第8回企画展	歌人・永井陽子 ～うたはふしぎな楽器～

2021年度	
開館2周年 記念展示	全円の歌人 大西民子 -沖ななも先生と民子の歌をよむ-
第9回企画展	歩き続けた日 -民子と戦争-
第10回企画展	作家たちがみた大宮 (1) 大宮公園と文学者たち
第11回企画展	あこがれはピアニスト -民子と音楽-
特別展示	宮澤章二の年賀状 -寅-
第12回企画展	偉大な先輩 -啄木に想いを馳せた民子-
第13回企画展	民子、春を詠む -花のにおい、風のささやき-

2022年度	
開館3周年 記念展示	つながる女流歌人
第14回企画展	埼玉の歌人たち -短歌への八つの想い-
第15回企画展	陸橋をこえて -大木実と大宮-
第16回企画展	うたをゆたかにするもの -民子が愛した絵の世界-
特別展示	宮澤章二の年賀状 -卯-
第17回企画展	母に受けたる大きたまもの
第18回企画展	民子の父・菅野佐介 -亡き父のマントの裾にかくまはれ-

2023年度	
開館4周年 記念展示	そらんじてるし花言葉 -大西民子、花を詠む-
第19回企画展	暑い夏! 寒い夏? 大西民子が感じた夏模様
第20回企画展	くらしの思い出
第21回企画展	第2回埼玉の歌人たち -歌に込めた想い-
特別展示	宮澤章二の年賀状 -辰-
特別展示	第11回さいたま 子ども短歌賞作品展示
第22回企画展	大宮×ミステリー小説! 作家たちが見た大宮2

主な参考文献

『大西民子集-現代短歌入門(自解100歌選)』大西民子/著 牧羊社 1986年
 『大西民子の歌(現代歌人の世界4)』沢口英美/著 雁書館 1992年
 『回想の大西民子』北沢郁子/著 砂子屋書房 1997年
 『評伝大西民子』有本俱子/著 短歌新聞社 2000年
 『まぼろしは見えなかった-大西民子随筆集-』
 大西民子/著 さいたま市立大宮図書館/編 さいたま市教育委員会 2007年
 『無告のうた 歌人・大西民子の生涯』川村香平/著 角川学芸出版 2009年
 『大西民子 歳月は贈り物』田中あさひ/著 短歌研究社 2015年
 『大西民子の足跡』原山喜亥/著 沖積舎 2016年
 『全円の歌人 大西民子論』沖ななも/著 角川文化振興財団 2020年
 『現代短歌』2014年2月号 現代短歌社

※歌の解説には、民子自身がのちに語ったエッセイ等を参考にしています。



2024年5月1日発行
 さいたま市立大宮図書館
 埼玉県さいたま市
 大宮区吉敷町1-124-1
 電話 048-643-3701
 FAX 048-648-8460

大宮図書館は盛岡市で生まれ大宮で活躍した歌人、大西民子(1924-1994)の関連資料を約10,000点収蔵しています。2024年は彼女が生まれてから100年となる記念の年です。女性の活躍や才能が発揮されにくい時代を力強く、ドラマティックに、そして自分の意思で生きた大西民子。本企画展を通じて多くの方々に大西民子とその歌、歌から現れる民子の人としての魅力を感じていただけたら大変嬉しく思います。

さいたま市立大宮図書館
 館長 馬淵 忠秀